

税理士みむらの

プ子経営塾

日本で一番大切にしたい会社より



株式会社 大谷

大谷勝彦会長の母キミ氏が、新潟市東堀で昭和26年にハンコの販売を開始。後を継いだ大谷勝彦会長が24歳の昭和41年、市内に開いた3.5坪の小さな店舗が同社の出発点です。

母を手伝うため進学を断念し、中学卒業と同時に就職

大谷キミ氏が内職のような形ではんこをつくり始めたのは、新潟の銅屋小路という小さな町の長屋の自宅でした。得意先を回って実印や認め印の注文を取り、仕入先の職人さんに、はんこづくりを頼んでいました。当時11歳だった大谷氏は苦勞する母親の姿を見て育ったため、早くお母さんに楽をしてもらうために、中学校卒業と同時に就職を決意。まず新潟県内の印章店に徒弟として入り、その後、岩手県盛岡市にあるはんこ店に修業をかねて就職しました。

人生に大きな影響を与える出会い

修業に行った盛岡のはんこ店の経営者は、下肢が不自由な障がい者で、当時、盛岡でいちばん大きなはんこ店を一代で築いた苦勞人でした。5年間の修業ののち、21歳のとき父親が亡くなり、母親の強い求めで、大谷氏は翌年7年ぶりに新潟に戻ります。

師匠の言葉・・・

「おれのような身体の間人でもいちばんになれたんだから、おまえがいちばんになれないわけがない。これから大変なこともいっぱいあるだろうけど、そう思ってがんばりなさい」

大きな夢・・・

「10年後に新潟でいちばんになる」・・・

繁華街に近いところに小さな店舗(3.5坪)を出し、それがあたり売れました。が、昭和45年「好酸球性肉芽腫」という何百万人に1人の難病にかかり、入退院をくり返すようになりました。

現在、右耳は聞こえず、手術により頭がい骨を取り除いた部分はへこんだままになっています。しかも、病気はいつ再発するかわからず、闘病は今も続いています。



私は生かされた命だと思っています。生かされたのなら、生かされたように私のやるべき役割があるのではないかと？障がい者の雇用はもとより、生活支援のための施設をつくりたいということはずっと昔から考えていましたが、それはもう、夢をかなえるというよりも、私の使命だと思っています。

障がい者雇用への取組み

印章業界は、もともと手に職をつけようとする障がい者が多く働いていた業界でした。(株)大谷も、創業当初より障がい者雇用に取り組み、新潟県内の養護学校やろう学校生徒の研修を受け入れ、正社員としても雇用してきました。現在正社員として下肢障がい、聴覚障がい等を持つ方が21名(うち18名重度障がい)、うち18名が正社員として活躍しています。

平成5年には、新潟県と地元企業が協力して設立した重度障がい者多数雇用企業「サンバーストにいがた」に参加し、筆頭株主となりました。さらには、自社で培った障がい者の就業ノウハウを提供するなど、筆頭株主として多額の出資金だけでなく、地域の障がい者雇用にも大きく貢献しています。

新たな市場創出に向けて

少子高齢化、ペーパーレス化の現代において実印、銀行印、認印、開運吉相印をはじめ、女性や若者を対象としたオシャレハンコや、ハンコ開運グッズ、ゴム印、表札、名刺など、豊富な品ぞろえでリピーターやファンを獲得し、新たな価値や市場の創出に貢献しています。また、3年前からは女性向けの専用のネットサイト「HANOSU」も開設しました。

平成24年度には次女の尚子氏が経営を引き継ぎ、父・勝彦氏の経営哲学・理念のもと、新たな市場創出に向けて、着実に歩み続けています。



株式会社大谷の経営理念

1. お客様に喜びと感動と満足を与え続ける
2. 働きがいのある職場づくりと社員の幸福をめざす
3. 社会福祉に貢献する集団をつくる

※ 単位：千円

	売上	経常利益	自己資本比率
平成25年6月末	2,695,297	362,451	53%
平成26年6月末	2,682,396	368,825	58.6%



子供の頃からのお母さんの「はんこ屋さん」の手伝い、障がい者の師匠の下での修業、生死を分ける大病と、そして幼い娘の事故。

大谷氏は、様々な苦節と逆境を乗り越え、障がい者雇用に努め、(株)大谷を日本でいちばん大きな売り上げを誇る「はんこ屋さん」に育て上げました。

老人ホームの創設の夢

大谷氏は社長を退いたあとも描いている大きな夢があります。

それは、障がい者や高齢者のための老人ホームをつくること。その前段階として購入した土地で、キノコ栽培や水耕栽培を行い、高齢者となった障がい者が働ける場をつくらうとも考えています。無農薬レストランも・・・夢の実現のため、大谷さんの歩みが止まることはありません。

